

南海トラフの巨大地震による震度分布・津波高について（第一次報告） 修正箇所

平成24年4月19日

該当箇所		修正内容
本文 P. 12	(2) 本検討会の強震断層モデル 平均すべり量 (修正箇所に下線)	数値の誤植修正

(1) 中央防災会議（2003）の強震断層モデル

中央防災会議（2003）の強震断層モデルは、1707年宝永地震以降の5地震（1707年宝永地震、1854年安政東海地震、1854年安政南海地震、1944年昭和東南海地震、1946年昭和南海地震）の震度の資料を重ね合わせ、それぞれの場所における最大の震度を再現できるように強震動生成域の強さ等を設定したモデルである。

このモデルは、想定東海地震、東南海地震、南海地震の3つのモデルからなり、これらを合わせた東南海・南海地震、東海・東南海・南海地震の全体モデルも検討された。想定東海地震モデルは Mw8.0、平均すべり量 2.9m、東南海地震モデルは Mw8.2、平均すべり量 3.8m、南海地震モデルは Mw8.6、平均すべり量 5.8m で、東海・東南海・南海地震の全体としては Mw8.7 の強震断層モデルであった。

これらのモデルの平均すべり量は、フィリピン海プレートの沈み込む速度から見ると、約 100 年間分の量に相当し、強震動生成域のすべり量の大きなものには約 200 年間分の量に相当するものがある。

なお、プレート間の固着率は1より小さいと考えられ、実際には上記の年数より多い年数を要するものと思われる。

(2) 本検討会の強震断層モデル

本検討会の強震断層モデルは、セグメントモデルを用いて平均応力降下量 4.0MPa として、4つのセグメントの強震断層モデルを設定した。これらのセグメントに対応するモデルを東側から順に、駿河湾域モデル、東海域モデル、南海域モデル、日向灘域モデルとすると、モーメントマグニチュード及び平均すべり量は、駿河湾域モデルは Mw8.0、平均すべり量 3.6m、東海域モデルは Mw8.5、平均すべり量 6.9m、南海域モデルは Mw8.8、平均すべり量 9.3m、日向灘域モデルは Mw8.4、平均すべり量 5.5m となる。強震断層モデル全体としては、Mw9.0、平均すべり量 7.6m、平均応力降下量 2.3MPa となる。

これらの各セグメントの平均すべり量は、フィリピン海プレートの沈み込む速度から見ると、東から順に、約 150 年分、約 150 年分、約 170 年分、約 80 年分に相当し、日向灘域を除くと、強震動生成域のすべり量の大きなものには、約 300～350 年分の年数に相当するものがある。日向灘域モデルの年数が他より少ないのは、この領域のプレートの沈み込む速度が速いことによる。なお、プレート間の固着率は1より小さいと考えられ、実際には上記の年数より多い年数を要するものと思われる。

なお、本検討会の強震断層モデルは、次に発生する可能性の高い強震断層モデルを検討したものではなく、南海トラフで発生しうる巨大地震の強震断層モデルである。